

21PO-pm276

ヘアカラーが引き起こす健康被害に影響する環境要因に関する調査

○矢島 吏那¹, 高石 雅樹¹, 浅野 哲¹ (¹国際医福大薬)

【目的】近年、ヘアカラーを行うことが一般的になっているが、これに伴い接触皮膚炎をはじめとする様々な健康被害が引き起こされている。ヘアカラーによる健康被害は主にヘアカラーに含まれる成分に起因するが、アレルギー素因などの遺伝的な要因や生活スタイルなどの環境要因の影響も想定されるため、個人差があると考えられる。そこで本研究では、ヘアカラーが引き起こす健康被害の発生活況と環境要因の影響について評価した。

【方法】本学薬学部 1~6 年生に対してアンケート調査を実施(配布時期 2018 年 4 月)し、ヘアカラーによる健康被害の実態把握と、これに影響を及ぼす環境要因について統計学的手法を用いて解析した。

【結果・考察】アンケート回収率は 76.3%(862/1,130 人)であった。本学薬学部学生でヘアカラーを行ったことがある人は 61.7%であった。ヘアカラーによる皮膚トラブルの頻度は「頻繁」が 0.8%、「過去に何度か」が 7.4%、「過去に一度だけ」が 5.7%であり、全体の 1 割以上が健康被害を受けていた。ヘアカラーにより現れる症状は、カラー剤が直接付着しやすい頭皮や髪の毛の生え際の「ひりひり」が最も多く 47.6%であった。発症までに要した時間は「ヘアカラー直後」または「1~6 時間後」が 97.1%で、症状完治に要した期間が「すぐに完治」または「数日」が 82.4%であったことから、一過性である刺激性接触皮膚炎を発症した割合が高いと考えられた。再度ヘアカラー時に起こった皮膚症状は「前回と同様」または「前回よりひどい」が 26.5%であり、これらの人は繰り返し症状が発現するアレルギー性接触皮膚炎であった可能性が高いと考えられた。一方で、ヘアカラーに対するアレルギーの遺伝的素因及び季節との関連は認められなかった。